

パプア・ニューギニアにおける民族考古学調査(三)

——ミルンベイ州イースト・ケープ周辺の調査概報——

高橋龍三郎・細谷葵・井出浩正・根岸洋

はじめに

ここに報告するパプア・ニューギニアの土器作りおよび生業(ヤムハウス)に関する民族誌調査は、先史時代の生態と社会、また縄文土器型式の実態を探究する学術的関心から生まれ出た課題である。従来、土器型式研究は、一方に考古学の基礎的方法論である編年学的研究を標榜し、他方では型式分布論等から導き出される縄文社会を探究する具体的方法論の一つとして認識されてきた。山内清男や佐藤達夫らの型式論の前提は、部族社会を背景とした製作技術の交流、技術の拡散問題であり、それをもたらず契機となる女性の移動、すなわち婚姻に基づく女性の婚入、婚出に関する理

論等であった(山内一九六九、佐藤一九七四)。

しかし、その実態の把握は仮説のまま残され、したがって土器型式の成立や一定地域の分布、さらに土器型式の变化の背後にある社会の実態的研究はほとんどなされておらず、土器型式に関する理論的な把握は依然として仮説のままである。筆者らは、山内清男や佐藤達夫らの仮説を継承しつつ、それを実証的に理解する方法論として民族誌調査を企画した。パプア・ニューギニアの東端部のイースト・ケープ地方にあるヤム島を調査地として選択し、二〇〇五年八月一三日〜同月二〇日まで現地に短期間滞在して調査を実施した(図1)。本調査に参加したのは、高橋龍三郎、細谷葵、井出浩正、根岸洋(東京大学大学院博士課程)の四名である。

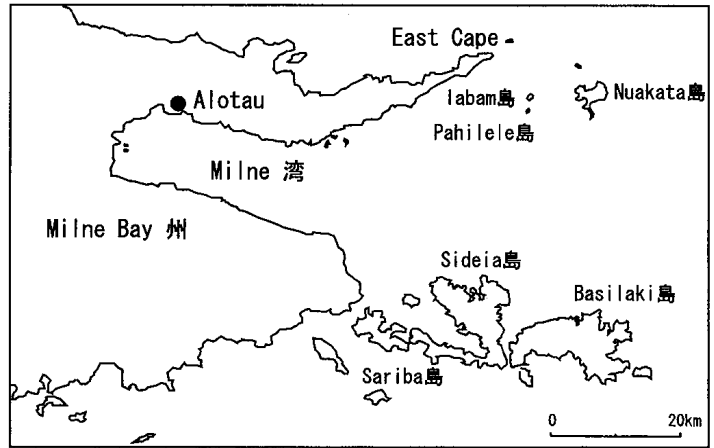


図1 調査地の位置

に予備的調査を実施しており、この地域にある程度の知識を有していたからである。とくに土器生産に関しては、セピク川流域のアイボム村やミノー村で、すでに実験的な調査を実施しており、学術的な進捗状況がある程度把握できていたからである（高橋 二〇〇五b）。

小規模な手造り土器生産を、パプア・ニューギニアという、今日的な社会的コンテクストから切り離して研究することはできないし、仮にできたとしても、それは他の諸点との関連を無視したやりかたで、この研究課題においては

パプア・ニューギニアにおける民族考古学調査(二)

本地域を調査地として選択したのは、自家消費を目論んだ、手造りの小規模で家庭的な土器生産を行っている地域が、アフリカやオセアニア、東南アジアなどの一部に限られている点、また過去二年間にわたり、私たちはパプア・ニューギニアの社会を研究するため

あまり意味の無いことである。そこで、土器生産に関する技術的な側面だけでなく、島人の生活の様子を、親族構造の視点から、また経済的視点などから総合的に読み解く研究戦略が必要となる。

土器型式分布を人間活動の行動系とみなすことにより、それを結果するにいたった行動内容を民族誌に探ることにより、回答を得ようとする方法は、欧米ではエスノアーケオロジーとして知られ、実験考古学などともに実証的方法論として確立している。すでにフィリピンのカリンガ地方を舞台に、米国テキサス州立大学のW・ロンゲーカーやM・スタークが中心となって、三〇年に及ぶ長期間の調査・研究が実施され、多くの研究成果をあげてきた(Longacre, W. and J.Skibo 1994, M. Stark 1993)。ここでは土器生産地と消費地の関係を通じて、考古学的関係事項を徹底して調査するプログラムが組まれており、生産地の問題や交換される人的関係、消費地側における論理を射程に含めて研究されている。土器型式の分布や型式変化に関する私たちの直截な問題意識をはるかに超えた研究といってもよい。

筆者らの調査がそれらと異なるのは、日本の縄文土器型式研究に根ざした、今日的な課題設定であること、したがって日本の長きに亘る型式研究の過程で浮上した、さまざま

な諸課題と関連して調査プログラムを設計している点である。その点で、上記ロンゲーカーやスターからの研究と必ずしも同一歩調をとるものではない。

しかし、行動系として捉える以上、彼我の研究課題や問題意識にそれほど大きな意識のズレはなく、多くの点で一致した課題設定が見られる。また私たちの研究課題を全うするには、相応の調査研究期間が必要であることも教えてくれる。

本稿では、四名の参加者が、それぞれの研究分野から、二〇〇五年度の調査について報告する。

1. 二〇〇五年調査概要

二〇〇五年度はパプア・ニューギニア島南東端にあるミルンベイ州イースト・ケープ周辺の土器調査を中心に行ない、滞在終盤においてポートモレスビー周辺に所在するモ

表1

日付	時間帯	行程・調査内容	調査地
8月13日	夜	成田空港より国際線にてパプアニューギニア首都ポートモレスビーのジャクソン国際空港へ	
14日	早朝	ジャクソン国際空港より空路国内線でミルンベイ州アロタウのガーニー空港へ	
	午前	アロタウから陸路イーストケープへ	
	午後	イーストケープから海路ヤバム島へ、上陸後、島内を徒歩にて踏査、聞き取り調査	ヤバム島
15日	午前	現地住民の耕作地, Skull's kape, 墓域等を踏査 土器製作実見	ヤバム島
	午後	親族に関する聞き取り調査(高橋・細谷) 島内の配置図作成(井出・根岸)	
16日	午前	土器製作観察 親族に関する聞き取り調査(マップの住居配置と世帯構成の照合)	ヤバム島
	午後	各住居における土器の所有個体数調査(高橋・細谷) 各住居における土器の個体数調査(井出・根岸)	
17日	午前	未調査分の聞き取り調査(高橋・細谷) 墓域, 土器集中域での土器表面採集(井出・根岸)	ヤバム島
	午後	ヤバム島から海路イーストケープへ、陸路アロタウへ	
18日	午前	陸路イーストケープの土器作りムラへサクサクの搾取場の実見 粘土採掘見学, 土壌サンプリング 土器製作観察, 聞き取り	アロタウ
	午後	調査再開 土器製作見学, 聞き取り	
19日	早朝	ガーニー空港から空路ジャクソン国際空港へ	ポートモレスビー
	午前	陸路モツムラへ 粘土採掘実見, 土器製作観察, 聞き取り調査 シンシン実見	
20日	午後	ジャクソン国際空港より空路成田空港へ	

(高橋龍三郎)

ツ族の聞き取り調査ならびに土器製作の観察を行なった。

調査期間は八月一三日(土)から同月二〇日(土)までの一週間であり、その内訳は八月一四日〜一七日午前までがヤバム島、一八日をイースト・ケープ周辺域、一九日をモツ族の調査である。なお、主な調査行程は別表にまとめたので参照頂きたい(表1)。本稿が対象とする二〇〇五年調査は特にイースト・ケープを中心とする当域調査の初回

調査であるため、以下のような基礎データの採取を調査の中心とした。

①ヤバム島内の住居等を含む諸施設の配置を簡易的な方法を用いて測量・図化すること

②同島の聞き取り調査による概括的な親族調査と生業調査

③同島における土器製作者への聞き取り調査と土器製作の観察

④イースト・ケープ域における聞き取り調査ならびに土器製作観察

⑤ポートモレスビー・モツ族の概括的な土器製作観察

上記のうち、①②③は本年度の主要な目的であり、④ならびに⑤は、③の比較対象として位置づけられた。

なお、本稿におけるインフォーマント名は図3のアルファベット表記に対応することを示しておきたい。

(井出浩正)

2. ヤバム島の概要

ヤバム (Yabam)⁽¹⁾ 島は、ニューギニア本島西部のミルン湾を挟む二つの半島と、約六〇〇の島とを合わせたミルンベイ州に属する小島である。州都アロタウ (Alotau) か

パプア・ニューギニアにおける民族考古学調査(三)

ら東へ約五〇キロメートルの地点に海岸沿いの町イースト・ケープ (East Cape) があり、そこから南東に約九キロメートル海を渡るとヤバム島がある。

ミルンベイ州の多くの島々と同様、四方を囲んだサンゴ礁によって周囲の遠浅の海が作りだされている、直径約五五〇メートルのいびつな方形をなす小島であるが、南西端に五〇メートルほど南に出っ張る小さな半島を持つ。丘陵部に露出する玄武岩や、玄武岩の風化した赤土から、島の成因は火山性のもものと推定される。島の北・東・南側には岩礁が広がる一方、集落の分布する西側にのみ砂浜が見られ細長い平坦地となる。集落面以外は小丘陵となり、特に島北部には最も標高の高い、狭い尾根がある。

ミルンベイ州は一般に熱帯雨林気候に属するが、南西方向のモンスーンの影響からか、この島では不明瞭ながら雨季・乾季の別が認められる。サバナ気候に属する首都ポートモレスビーとは、雨季・乾季の訪れる時期がずれる事になる。

主たる使用言語はオーストロネシアン語族の一つ、タワラ (Tawala) 語である。この言語は、ミルンベイ州の中でもニューギニア本島沿岸および周辺の島々でのみ話されているが、地域差が大きい言語である (Ezard 1997)。

島民の生活一般について、行政から任命されているカウ

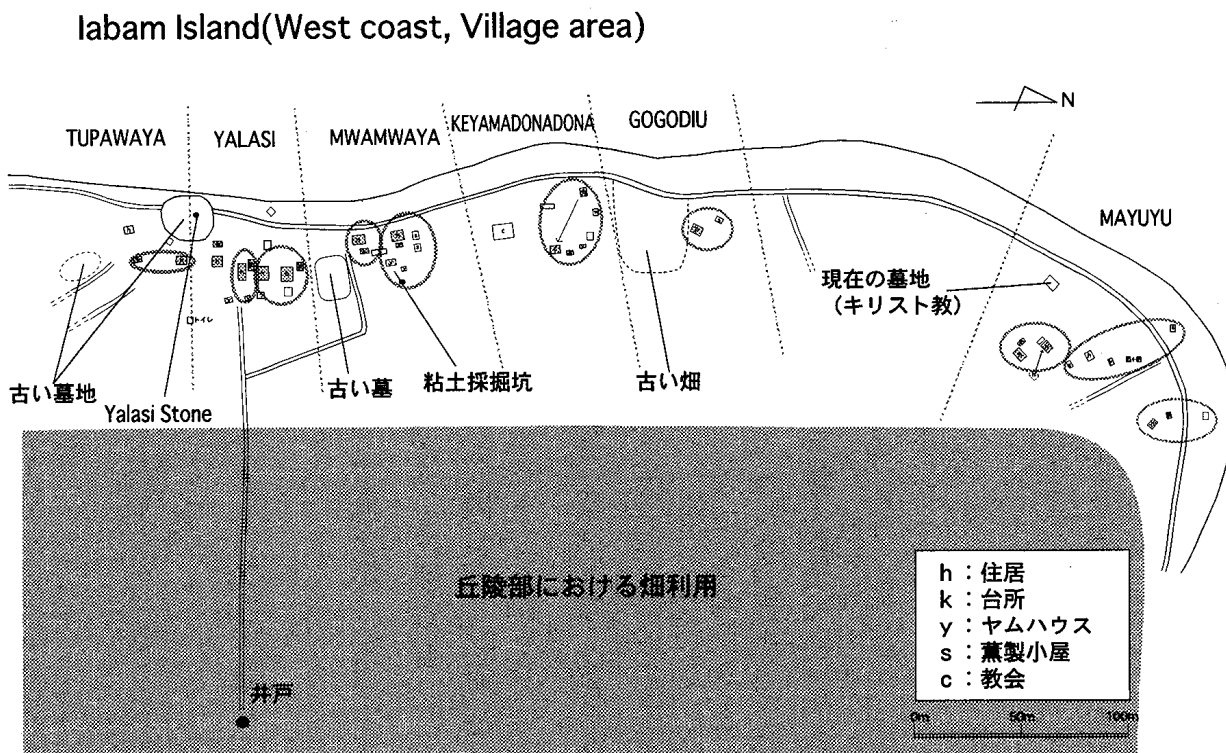



図2 labam 島内の集落配置

ンセラ(図3 M)を主なインフォーマントとして聞き取り調査を行った。人口規模は三〇〇〜四〇〇人程度で一定していない。これは、南に約八キロメートルの地点にあるパヒレ(Pahile)島と親族関係の面で関連が深いからであり、両島民は間を頻繁に移動している。また周辺の大集落としては最も近いイースト・ケープを初めとして、周囲の島々との人的交流もある。幼年・若年層は教育・就業機会を求めて島外に出ているのが一般的であり、島内人口は老年・成年(中高年)・一部の幼年層で構成されている。

主な生業は、タロイモなどの農業・島周辺域での漁業である。農業の実際については本稿³で触れ、漁業については来年度調査を行う。基本的に過疎地域であって観光地化されることなく、電気・水道・ガスなどのインフラはまだ整備されていない。信仰宗教はキリスト教(聖公会)であり、メソジスト派の United Church of Papua New Guinea に帰属する教会がある。牧師が派遣され任期付で常駐する形である。

簡易的な測量によって作成した集落配置図(図2)によれば、西側海岸部に計六つの集落(hamlet)がある。それぞれに高床式住居・ヤムハウスと呼ばれる高床式倉庫・炉を持つ台所・魚類を対象とした燻製小屋などが分布している。ミルン湾周辺地域は母系制社会であるが、土地の居

住権を必ずしも女性のみが持つとは限らない点に、母系制社会の変容の一端を見ることが出来た。居住者と土地所有者が異なる場合もあるようであり、いわゆるオウナーシップについては複雑な様相が想定されるため追加調査が必要であろう。一方、台所や燻製小屋・風除け小屋など、親族間で共有される性格のものもある。この他、島の多くの面積を占める畑や漁場は、特定個人もしくは親族によって所有されるものらしいが、今回の調査では対応関係を把握できなかった。日常生活域から離れると、親族による共有を把握できる良い例として墓域がある。ただし、上部に配石を伴う土壙墓のような古い習慣が残る墓域(例 Yalasi)と、キリスト教による墓域(例 Mayuyu)とがある。前者は今日行われていない墓制であるらしいが、島の発見譚と結びつくストーンサークル状組石⁽²⁾(Yalasi Stone、)が近くに構築されていたり、丘陵頂部や急勾配の崖に構築されている二次葬墓⁽³⁾(Skull Cave)と関連が深いものもある。今日にあっては神聖視され人々の記憶に深く根ざした信仰の一つと考えられる。

次回調査ではGPSを用いて、集落を初めとする島の構成要素の位置を記録し一般調査の基礎資料としたい。要素それぞれに応じた、補完的な聞き取り調査も不可欠である。

(根岸洋)

3. ヤバム島のヤムハウス

① ヤムハウス調査の目的

ヤバム島が位置するミルンベイ州は、ヤムイモ貯蔵施設である高床式倉庫、ヤムハウスの使用で知られている。ヤムハウス、またこれに関連するヤム祭りはパプア・ニューギニアの文化的シンボルのひとつとしてあつかわれており(細谷二〇〇五)、また近隣のトロブリアンド諸島では、ヤム祭りが観光資源ともなっている。

筆者(細谷)はかつて、弥生時代中〜後期における階級制社会の確立のなかで、高床式倉庫の導入が重要な要素のひとつとなったという議論を提示した(細谷二〇〇三)。弥生時代前期まで中心的な貯蔵施設だった貯蔵穴と異なり、高床式倉庫は主に集落内に作られる地上建物である。筆者(細谷)は、その導入が集落景観を変え、ひいては人々の活動空間のあり方や観念にも変化を及ぼしたのではないかと考えた。すなわち高床式倉庫は、特定の作物を象徴する建物として、また年間を通して食料を取り出すために人々が定期的に通い、脱穀などの作業も行われる場として、人々の生活に大きな影響力をもつ空間となりうる。この空間の管理を媒介として、集落リーダーの権力が拡大されたとい

う解釈をうちたてた。

この考古学的解釈を導くにあたって、浅川（一九九一）、ウィルソン（Wilson 1988）らのトロブリアンド諸島ヤムハウスの調査をはじめとした、高床式倉庫の民族誌調査例を大いに参考にした。これらの調査例によると、倉庫は単に貯蔵施設であるだけでなく、リーダーの権力を象徴する場であったり、儀礼の場であったりしている。今回のヤム島調査にあたっては、先史時代の倉庫に対する研究視野の拡大につながられるよう、生きた社会における高床式倉庫のあり方について自らその文化に触れて理解することを目的に、ヤムハウスの調査を行った。

② ヤム島ヤムハウスの概要

今回の調査時点で、ヤム島で観察できたヤムハウスは七軒である。うち一軒は、現在は使用されておらず、廃棄状態になっていた。

ヤムハウスの形状は、七軒とも切妻屋根の高床式建物である（写真1）。大きさも、屋根頂までの高さ二〜三メートル、幅二メートル前後、長さ三〜四メートルと、ほぼ一様であった。柱の数は、六本のもものが四軒、四本のもものが三軒である。床下のスペースは、土器用の土などが置かれていることもあるが、基本的には特に利用されていない。建物の一方の正面に、ヤムイモを出し入れする扉が設けら

れている。出し入れの足場にするためのテラスを設けたものもあった。

ヤムハウスは、ヤムイモ畑の所有に応じて作られるので、ほとんどの場合、一世帯あたり一軒を持っている。ただし、以前に所有していたヤムハウスが古くなったので壊したが、新しいものを作る時間がないという理由で、現時点でヤムハウスを持たない世帯もいくつかあった。こうした世帯では、寝室の一部や床下に臨時に作った貯蔵施設にヤムイモを貯蔵するなどしている。代替の貯蔵施設でも、地面から



写真1

離れた「高床」の状態は保たれなくてはならない。地面近くにヤムイモを置くと「根が出てしまう」からである。また、これらの世帯も、時間ができ次第ヤムハウスを作る意思がない、現在ヤムハウスがないのを少々恥ずかしく思っているとのことだった。

一方で、ヤバム島に在住していない者が、島内にヤムイモ畑だけは所有しているという理由で、ヤムハウスを所有する例もあった。Hの姪、Mの父およびイトコが各々所有する三軒がそれである。うち、Mのイトコの所有する一軒が、廃棄状態のものである。この男性は最近あまりヤバム島に来ず、古くなったヤムハウスも建て替えずに廃棄したままだし、所有するヤムイモ畑も荒れてしまったということだった。

上記の島外在住者のもの三軒を含む六軒のヤムハウスは集落の中に建てられており、Gが所有する一軒のみ、山中にある焼畑の近くに建てられていた。集落の中に建てられる場合は、高床式の寝室、地上式のキッチン、そしてヤムハウスが一世帯の建物セットとなっている。集落の大部分の家屋は海岸をつたう公道に沿って並ぶが(図2)、公道側から山側に向かって、もっとも公道に近いところにキッチン、次に寝室、一番山側がヤムハウスという建物の配置が一般的である。島外在住者のヤムハウスは、その者の親戚である島内在住者の世帯の建物セットに組み込まれており、やはり山側に配置される。

③ ヤムイモについて

ヤムハウスに貯蔵される作物はヤムイモのみである。他の作物と一緒に貯蔵すると「駄目になる」と言うが、それ

以前に、ヤバム島においてはヤムイモ以外の作物は貯蔵されていらない。ヤムイモとそれ以外の作物には、以下述べるように撒種、収穫のサイクルに違いがあり、それが貯蔵の有無に関係していることが観察された。

山の斜面に作られる焼畑では、ヤムイモのほか、バナナ、ポポ(パイヤ)、タピオカ、パイナップル、カボチャ、アイビカ(葉を野菜として食べる植物)、サトウキビ、チリペッパーなど十種以上の作物が混在して栽培され、島民の主食料源となっている。焼畑は一年単位で場所を移動し、三年ほどで再び元の場所に作ることができる。ヤムイモ以外の作物には、特に撒種や収穫の時期が決まっていない。毎日の食事の支度の一環として、一家の主婦がその日の分の作物を収穫しては、収穫物の一部をタネとして適宜撒いておくという、“日”ベースの利用サイクルである。

この“日”ベースのサイクルは、タンパク質源である魚介類の利用についても共通している。魚は基本的に当日食べる分だけを釣ってくる。男性が行うカヌー漁などで魚が多めに獲れた場合は燻製にして保存するが、長持ちはしないのでせいぜい二日間食べ切ってしまう。

これらに対して、ヤムイモのみは、撒種は九月十一月、収穫は七月八月と、“年”ベースのサイクルで栽培されている。筆者らの調査はちょうど八月だったため、ヤムイモ

の収穫を見ることができた。掘り棒を使い、次々にヤムイモを掘り出していった(写真2)。二週間ほど掘り切ってしまうと言う。収穫したヤムイモは、特に大きいものは祭りなど特別な機会用、その他大きめなものや傷があるものは食用、小ぶりなものは種イモ用に分類される。食用の分はその後二〜四ヶ月にわたって食べ、また種イモの分は次の撒種の時期まで保管するので、貯蔵施設を要することになる。



写真2

ヤムイモはまた、教会の行事などの特別な食事には欠かせないものでもある。住民たちに、「好きな食べ物」と「大事な食べ物」はそれぞれ何かと質問したところ、前者の答はタピオカ、魚、バナナ、ヤムイモなどばらつきがあったが、後者の答は一樣にヤムイモだった。栽培サイクルが違うというだけではなく、住民の意

識の中でもヤムイモは特別な位置をしめていることが考えられた。

④ ヤムハウスについて

建造物としてのヤムハウス、またそれにかかわる住民の意識に関して聞き取りを行った。

まずヤムハウスの建造については、基本的にヤムハウスを所有する世帯の男性が建てる。Hの世帯は年配の女性の一人暮らしであるので、島外に住む息子が来て建ててくれたということだった。一軒のヤムハウスの建築には一〜二週間を要する。

建材は統一されておらず、山中で入手できる材料を適宜使って作る。ただ屋根を葺く材料は、ココナッツの葉またはサゴヤシの葉と決まっている。サゴヤシの葉の方が腐りにくく長持ちするため、ココナッツの葉で屋根を葺いたものは一年ほどしかもたないのに対し、サゴヤシの葉で屋根を葺いたものは四年から五年にわたって利用できる。屋根がだめになったものは、ヤムハウス自体を廃棄して新しく作ることになる。サゴヤシはヤバム島に生えていないので、ニューギニア本島のイースト・ケープから取り寄せねばならず、手がかかる。観察した七軒では、五軒がサゴヤシ屋根、二軒がココナッツ屋根だった。

ヤムハウスが高床であるのは、前記したように、ヤムイ

モは土から離して保存しなければならぬからである。ヤムイモを乾燥状態に保つため、床下には物を置かず、風が通るようにしておかなくてはならない。ヤムハウスの大きさは、所有するヤムイモ畑の大きさ、すなわち見込まれるヤムイモの収穫量による。

ヤムハウスを建てる位置については、まず集落内に建てるか畑の近くに建てるかは所有者の判断によるもので、特に決まっていけないということだった。集落内に建てている住民にその理由を聞くと、目の届くところにヤムハウスを置いておかなければ、ヤムイモを盗まれてしまうからというものが多かった。同じ理由で、出し入れのための扉の位置も、寝室から見える方の面にしているという世帯がいくつもあった。一方、畑の近くに建てる場合の理由は、種イモをいちいち畑から集落に持ってきて、再び畑に持っていくのは大変だからということだった。観察したなかで唯一畑に建てられていたGのヤムハウスは、盗難除けのためか頑丈な金属の扉と南京錠がとりつけられていた。

集落内にヤムハウスを建てる場合の、寝室など他の建造物との配置関係について、なぜヤムハウスが一番山側になるのかを質問すると、海側の公道から見えないように隠すためだということだった。ヤムハウスを他人に見られると、ヤムイモ畑を所有していることを知られてしまい、嫉妬さ

れて魔術をかけられるからというのがその理由である。島民同士であれば、誰がヤムイモ畑を持っているのかは当然知っているもので、島の外から来る者の目を意識しているものと思われた。

ヤムハウスに関わる象徴的な観念については、まず、祭祀などは特に行われていない。かつては、葉の上にヤムイモをのせて呪文を唱え、豊作を祈る儀式のようなものがあつたが、現在は行われていないと言う。ただヤムハウスに関するタブー、規則については、いくつもあることがわかつた。

- ・特別な機会用、食用、種イモ用のヤムイモは区分して貯蔵し、種イモには撒種のときまで触れてはならない。触れると身体に害がおよぶ。
- ・ヤムイモの精が逃げないように、ヤムハウスの扉は必ず閉めておく。
- ・ヤムハウスを所有する家族以外の者は、中に入ってはならない。(中のヤムイモを他人に見せてはならない)
- ・床下で火を燃やしてはならない。ヤムイモが芽を出してしまうからである。
- ・ヤムハウスの壁を叩いてはならない。
- ・寝所の中にヤムイモを貯蔵してはならない。(必ずヤムハウスを設ける)

以上のタブー、規則を見ると、床下で火を燃やさないなどの実用的なもののほかでは、「ヤマイモの精 (Yam Spirit)」なるものが認識されていること、ヤマイモを他人の目から「隠す」という考え方が強いことが理解できた。

⑤ ヤバム島ヤムハウスについての考察

ヤムハウスを利用してはいるヤバム島の人々と実際に触れ合ってみると、筆者らが既存の民族誌調査例を通して想定していた「高床式倉庫」像とはかなり異なる状況であることが見えてきた。

まず、ヤムハウスは特殊な目的をもつ建造物ではあるが、集落景観の一部として、また活動空間として、観念的にも重要な意味を付与されるといった方向性は、ヤバム島では希薄だとわかった。ヤムハウスを建てる場所も集落であったり畑であったり一定していないし、儀礼であれ実質作業であれ、ヤムハウスが特に何かの活動と結びついているということもない。また、数年で完全に廃棄され、同じ場所に建て替えられるわけでもないヤムハウスは、永続的な特殊空間を形成しているとは考えにくい。

加えて、貯蔵という行為に付属すると考えられた、食料利用の「定期性」や「計画性」といった観念も、ヤバム島では筆者らの考える農耕社会のステレオタイプとは違う形をとっているようだ。ヤマイモの撒種・収穫こそ他の作物

とは異なる「年」サイクルで動いてはいるが、これを貯蔵することで一年じゅう主食として計画的に食べようというのではなく、数ヶ月で食べ切ってしまう「季節の食べ物」で終わらせている。すなわちヤムハウスは、常時食料を供給する場ではなく、人々が定期的に通う建造物ではない。

上記から考えられることは、同じ地上建物の貯蔵施設でも、稲作社会のように基本的にひとつの作物の栽培を主軸に置く、言わば「一様性栽培」社会のそれと、ヤバム島のように多様な作物や資源を併行して利用し、「日」ベースの生活サイクルを基盤にする「多様性栽培」社会のそれとは、まったく社会的意味が異なるのではないかということである。すなわち、倉庫について考えるにはまず、その形状や様子だけでなく、背景になる社会の生活サイクルについて考えねばならない。

日本の縄文社会の研究では、冬期に食料が乏しくなる環境下では木の実等の貯蔵が不可欠であり (cf. 坂口二〇〇三)、それが食料利用の年間計画などの観念を生んで、のちの稲作社会への移行をスムーズにしたという考え方も提示されてきた (Takahashi & Hosoya 2002)。しかし、貯蔵行為が必ずしも食料利用の年間計画に結びついていないヤバム島の例を知ると、縄文時代の木の実貯蔵も、食料のない冬期のための「季節の食べ物」だった可能性も考える必

要に思い至る。コメという単独の作物の年間利用計画を要したであろう稲作社会への移行については、より複雑な社会構造変化を考える必要があるかもしれない。

ただ、食用イモより種イモに焦点をあててヤムハウスを見るなら、ある種の“年”ベースの周期性が見出せる。また実際に、ヤムハウスを集落に作る場合は全般的な盗難除けという理由だが、畑に作る場合は種イモ運搬の便宜という理由が挙げられる事実から、住民も貯蔵対象としてむしろ種イモを重視していることがうかがえる。根木(二〇〇五)は、弥生時代の高床式倉庫も種用だったという議論を提示している。貯蔵方法や貯蔵される作物の種類ばかりでなく、種用、食用といった区分の問題とその意味にまで議論を進めることで、先史社会と倉庫のあり方の研究に新しい視野が広がる可能性がある。

⑥まとめと展望

パプア・ニューギニアにおける生業関係の調査は、焼畑やヤムハウスを対象にしたものも含め、過去多くの例がある。現代のように西欧文化が入り込んでくる以前の時代に調査され、「伝統的」文化の姿をよりよく観察できている例も存在する。だがそれでも、我々が今新たに調査を行うことには、やはり意味があると考ええる。

第一に、民族調査の主体は、対象文化をできる限り理解

したうえで、その中で諸々の文化要素がどんな社会的意味をもっているのか考えることにある。先人の研究例を読むだけでは、知識は得られても“理解”は難しい。自ら現地に立ち、住民の生活と全面的に触れ合ってこそ、我々とは異なる彼らの価値観など、文化事象の根底にあるものを感じ取ることができ、研究に新たな視点を導入できる。

第二に、西欧文化など多くの外的要素が入り込んでいる現在だからこそ、変動する文化の中で変わるもの、変わらないものの様相を観察できる。たとえばヤムハウスを今まで存続させているものは何なのかなどは、「伝統的」生活の時代よりも、むしろはっきりと知ることができるのではないかと思う。

今回の調査は、ヤムハウスを利用する社会に触れた初めての経験ということもあり、自らが高床式倉庫というものに抱いていた先入観に気づき、見直すにとどまった。だがそのなかから、“多様性栽培”社会の貯蔵施設であるヤムハウス、という新しい視点を得るにいった。

今後の調査では、ヤム島およびその周辺地域社会におけるヤムハウスの社会的意味のより深い理解をめざしていきたい。ヤムハウスが排他的にヤムイモと結びつく貯蔵施設であり、またヤムイモが人々にとって観念的に重要な作物であることはわかった。だがこれがヤム島では、よく

知られたトロブリアンド諸島の例のようにヤムハウスを「見せびらかす」方向に向かわず、まったく逆の「隠す」方向に向かっている。そのことが社会の形成にどのような関係していくのか、このトロブリアンド諸島や、ヤムイモをヤバム島へ輸出していたというノルマンビー島などの現地に立ち、各々の住民のもつヤムハウスへの意識を比較しながら「感じ取る」作業を行いたい。
(細谷葵)

4. 親族調査

集落 (hamlet) のうち、今回の調査対象とした Yalasi・Keyamadonadona について聞き取り調査を行い、親族構成の基礎的な性格を把握することに努めた。

ミルンベイ州の南西部に広がる島嶼部については、トーテムズを伴う母系制社会が存在することが古くから知られている (Seligmann (1910 [1976])) が、トーテムズの意味や構造性が、二〇世紀初頭の状態と比較しても更に形骸化しているという指摘が多くなされている。特に、ヤバム島から東に約八キロメートルの地点にあるヌアカタ (Nuakata) 島における最近の調査 (Mallet 2003 pp57-58) では、トーテムにまつわるタブーなどの知識が忘れ去られている点が指摘されている。ヤバム島でも同様の状

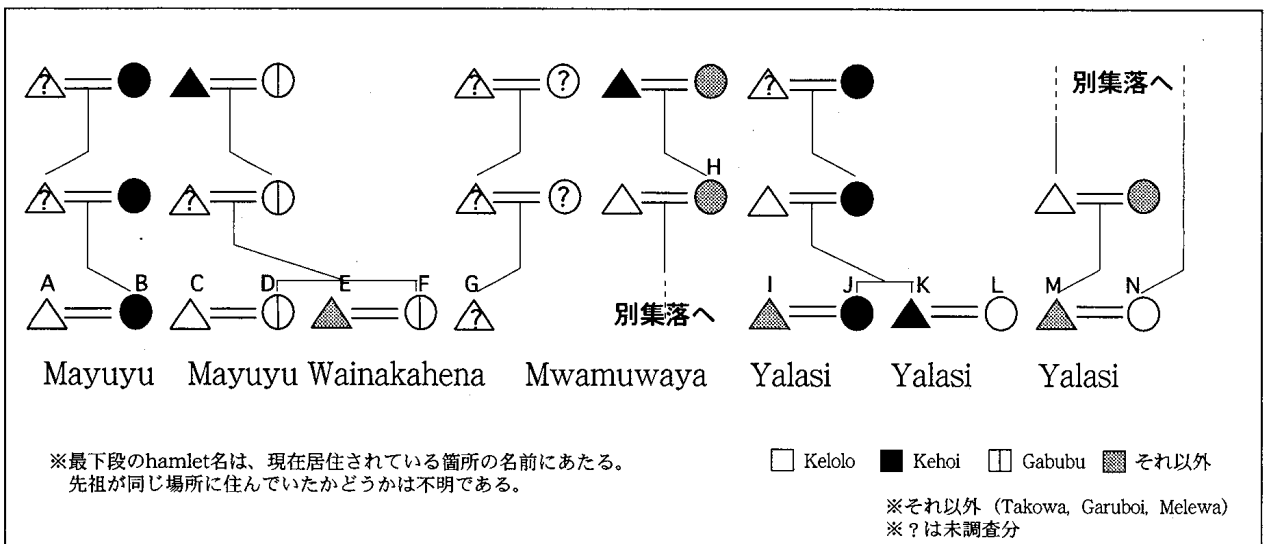


図3 過去3世代の親族構成とクラン

況が予め予想された。

まず母系制社会の現状を知るため、各集落の居住の移り変わりを土地相続の観点からみてみる。母から娘（多くの場合長女）に土地相続が行われる原則が守られている（図3のB・D・H・J）。娘が産まれず外部から嫁をもらった場合では、一時的に息子に居住権が移る（K・M）が、次世代の娘にのみ土地相続権そのものが受け継がれることになる。ただし必ずしも母方居住性が守られているとはいえず、結婚生活の何年かを夫の生まれた村で過ごし、後に母方の集落に居住の場所を移す場合も見られた。

次に、個々人の属するクランについて聞き取りをしたところ、いずれも鳥をトーテムとするバード・クランであった。多数を占めるのがケロロ（Kelolo）・ケホイ（Kehoi）である。ただし鳥以外のトーテム、例えば蛇・植物クランなどへの対応性については把握できなかった。トーテムに関連する幾つかのタブーについても、同一のクラン同士の婚姻の禁忌以外、確認することができなかった。こうした状況について、少なくともヌアカタ島と同様の状況ということが出来よう。

バード・クランのうちの幾つかについては、イースト・ケープから見てミルン湾を挟んだ対岸西部の、ワガワガ村（Wagawaga）において二〇世紀初頭からその存在が記録

されている（Seligmann 前掲）。ミルンベイ州の他の島々においても多くのクラン名が記録されており、分布傾向を把握するのは非常に困難である。しかし少なくともヤバム島で聞き取ることができた諸クランは、ヌアカタ島やノルマンビー島といった周辺の島々よりも、イースト・ケープを初めとするニューギニア本島側との共通性の方が強いと指摘できる。

次年度以降は、ヤバム島・パヒレレ島・イースト・ケープとの調査成果を突き合わせて、三〜四世代前まで親族調査データを揃えることが望まれる。また教会側の布教記録・政府による記録も参照し、多くの観点から調査精度を高める事が必要であろう。（根岸 洋）

5. 土器製作について（図4）

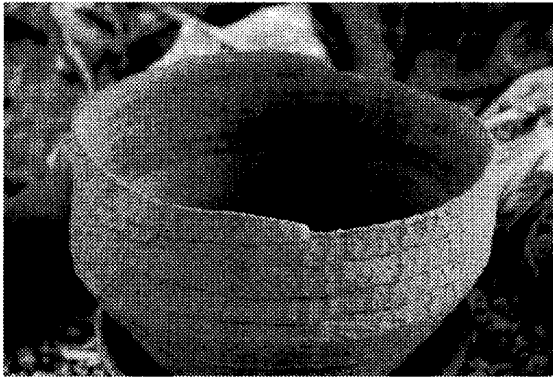
今回筆者らは、ヤバム島（素地から成形・整形段階まで）、イースト・ケープ（素地から成形まで）、モツ族（粘土採掘、素地から成形・整形・焼成まで）の三箇所土器製作に関する概括的な調査を行なった。本節ではこれらのうち、調査時間を最も多く設けたヤバム島について取り上げることにしたい。なお、ここで筆者が報告する〇は、ヤバム島の南隣にあるパヒレレ島に在住する土器製作者であり、ヤ



1 成形(素地の準備)



2 輪積み



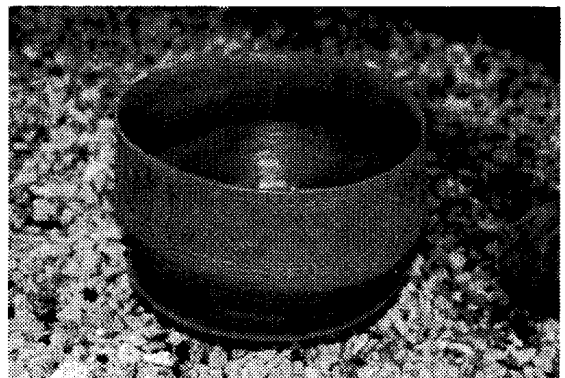
3 器面の立ち上げ



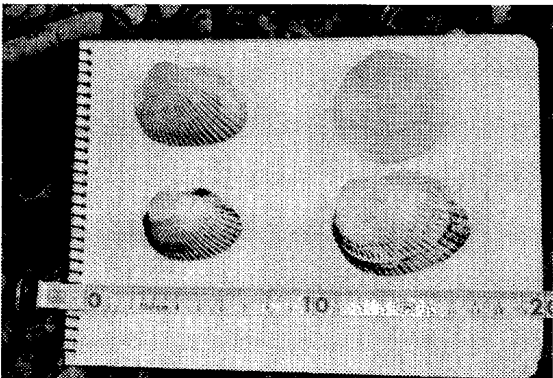
4 器面調整(ケズリ)



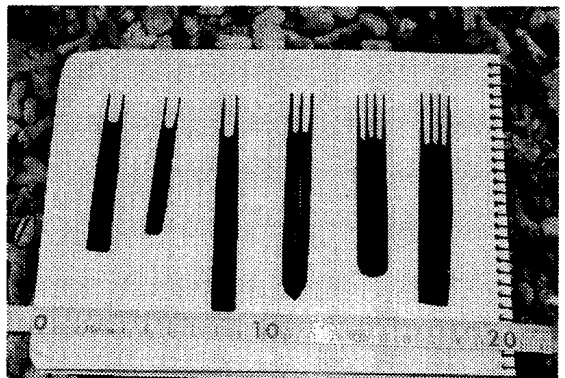
5 施文



6 施文後



7 器面調整具



8 施文具

図4 ヤバム島における土器製作

バム島にはHという製作者が存在することを併記しておきたい。Pについては紙数の関係上、別の機会に報告する予定である。

①粘土の準備

ヤバム島は玄武岩質を主成分とする火山性の島であり、土壌はラテライトを多分に含む。そのため粘土は明赤褐色を呈し、土器の焼成前、焼成直後は赤褐色を帯びる。粘土に含まれる砂礫や砂利は少量であり、そうした不要な混和物（不純物）は、土器製作時の素地作りの段階で水を加え揉みほぐされながら丁寧に取り除かれてゆく。

今回Oが使用した粘土は、Hが所有する粘土採掘坑から得たものである。Hは筆者らがヤバム島を訪れた当時、同



写真3

島において土器製作を行なう唯一の女性であり、また島内から産出される粘土を入手するには彼女の許可が必要であった。つまりヤバム島の粘土利用に関する権利をPが（そしてHの姻族が）有していたことになる。また、採掘坑はPの居住地の裏山にあり、筆者らの踏査によって、彼女が山の裾野の稜線に沿うように採掘していることが観察された（写真3）。恐らく同様に粘土帯が横走しているためと考えられる。そのため、草本が茂っているため明瞭ではなかったが、かつて採掘に使用したと考えられる地点一帯に溝状の掘り込み跡を認めることができた。現在彼女が使用している採掘坑は概ね現地表面より二メートルほど縦掘りしたものである。

次に、鉄製のバンブーナイフ等で粘土を掘削する。採掘された粘土はヤシの葉で編んだ網かご（バスケット）に入れられ住宅脇などの日影に安置される。いわゆる素地を寝かせた状態で使用時までしておくのである。聞き取りの結果、はっきりとした寝かせに要する期間を特に認識しているわけではなかったが、一ヶ月ほどの時間を寝かせに用いるという。

②成形

成形は、まずこぶしほどの大きさの粘土を手や粘土をこね、また粘土紐を作成するための板の上で丸棒状にのぼし

た後、それを手で平たく丸状の塊にし、膝の上などに載せ、中央をくぼめて土器の底面を作出した。それを足の間に挟みこむようにして安定させ、粘土紐の輪積み成形を行なうてゆく(図4-1)。輪積み用の粘土紐は概ね直径一〇ミリメートル程度であり、その都度必要な分だけバケットから粘土を取り出し、粘土紐を作り輪積みを行なった(図4-2)。成形は底部から胴部の下半まで、胴部下半から胴部上方まで、そして胴部上方から頸部と口縁部までという大きく三段階の工程に分けられていた(図4-3)。それぞれの工程ですすむと後述のナデやケズリを行い、器面調整を行なう。粘土紐の接合には内外面の上下のナデによる接合が基本的であるが、胴部から頸部への屈曲点に差し掛かると、内径接合へ移行して形を作つてゆく。口唇部は貝殻の内側でケズリだしを行い平滑にしたのち、指と指の間を器壁に挟み断面乳頭状の口唇を作出していた。

③器面調整(図4-4)

器面調整はナデとケズリを中心とする。〇の場合、ナデには貝殻を用いるナデと、指を用いたユビナデの二種類を観察できた。貝殻は、アナダラ属と推測される貝殻片と、逆に腹足が目立たない平滑な貝殻片の二種類を用いていた(図4-7)。これらは海岸から必要に応じて採集されるということであるが、土器製作ごとに採集されるわけではない。

く、複数回工具として用いられるようである。貝そのものは食用である。

貝殻によるナデは、貝殻の外側縁を押し付けるように充てて整形してゆくが、同時に内面を使うこともあり、両者の併用、または器厚の調整も兼ねたケズリと併用している場合が多い。ユビナデは各部位の成形後に行なうことが多い。器面の凹凸がなくなるよう、指に水をつけ内外面を整形する。ユビナデが施される方向は、底面付近は器底に沿って横位に施されることが多く、胴部から口縁部にかけては縦位に施される傾向が看取された。

一方、ケズリは主として貝殻の内面を用いて行なわれていた。土器の器面に対し鋭角に当てて掻きとるようケズリを行い、貝殻片の内面にはケズリによって生じた粘土が溜まってゆく。そのため、ケズリによって生じた貝殻片の粘土が溜まると一旦作業を止め、粘土を取り除いた後に再開するという工程が繰り返される。ケズリに用いた貝殻は内外面の側縁部付近の摩擦が著しく、腹足が消滅していた。

④施文(図4-5)

施文はギルマ(guilma)と呼ばれる二、数本の櫛歯を有する木製施文具が用いられる(図4-8)。〇によれば、ギルマはブラックパームと呼ばれるヤシ科植物を加工して作られ、その製作は既婚者であれば夫が妻の意に沿って製

作し、未婚者であれば母親から道具を継承する。通常製作者は数本のギルマを有しており、A、B共に空き瓶にギルマを保管していた。ギルマについては、Tucsonにも報告している (May and Tucson 1982)。

施文は器形が完成し、ユビナデ後、数十分乾燥を経てから行なわれた。まず口縁上方と頸部と胴部の屈曲部分を波状の平行沈線文で横方向に区画し、口縁部文様帯を形成する。次に、同様の施文具を用いて文様が時計回りに文様が施されていった。OとPでは描く文様が異なり、今回の製作ではOは合計六つの単位文様を描いた。Oが描いた文様は、施文順に、①波、②クンドウッドラムと呼ばれる戦闘用の太鼓、③カヌーのマス、④蛇、⑤波、⑥戦闘用カヌーであった (図4-16)。これらはOに一つ一つ文様の意味を聞いて得られた。ただし、Oは文様一つ一つについて、なぜそれを描くか、またなぜそのような意匠で文様を表現するのかについて、明確な意識や自覚を持っていないようであった。ただし、一旦文様を描き始めると、描き終わるまで一切の修正はなされず、また単位文様の施文順序も躊躇することなく描かれていたことから、Oは少なくとも器面に対する大枠の文様の割付や順序 (記憶や理解として) を有していることが推察された。これがOに特徴的であるか、それとも当域一帯の製作者にある程度共通しているか

について、さらに調査を進めてゆく必要がある。また併せて、具体的に一人の土器製作者が有する単位文様やその文様の出自 (誰から得たか)、さらに特定文様を描くということに対するその背景等も、本域で中長期の期間を設けて綿密に調査をしてゆかねばならないだろう。

⑤ヤバム島土器製作に関する課題と展望

今回のヤバム島の調査はイーストケープ一帯の調査の端緒に位置づけられることは冒頭で述べたとおりである。今次調査で得られた情報はまだ咀嚼の段階にありさらに調査を重ねてゆく必要があるが、今次調査をもとに、現在筆者らが検討している課題を以下に列挙し、本節のまとめとしたい。

- ・ヤバム島を中心とする本域の継続調査によって土器型式における変化の社会的要因ならびにその変化の方向性 (結果) を個別具体的に検討すること

- ・エンジンニア諸島の技法との共通点ならびに相違点を個別 (成形・整形・器形・文様) に比較すること

- ・当域における土器の変化が起こりやすい (差異の生じやすい) 部分を探ること

↓型式学的まとめりとして妥当性のある属性を検出し、それらが時間軸ならびに空間軸を得るか検討する

(井出浩正)

おわりに

本稿では、二〇〇五年八月に実施した、小規模で家庭消費的な土器生産および生業（ヤムハウス）に関する民族誌調査の成果を報告した。縄文時代の土器型式研究では、解明が困難な分野を、民族誌的手法を使って解明するための補助的方法論として実施した次第であるが、予想を超える多くの成果を得ることができた。

四名が共同で調査した内容は、島内の親族組織については根岸が報告し、土器製作に関する調査内容は井出が原稿を担当した。また農耕をはじめ生業活動、ヤムハウスに関しては、細谷が担当した。それらの研究成果は、極めて短期間の調査でありながらも、土器型式の実態的研究を進める上で大変有意義なものであった。しかし、長期間の調査ではないために、それと同等の多くに欠落があることも確かである。型式の成立や拡散、伝播には、島人の血縁に基づく系譜関係や、移動に伴う技術的移転が重要な要件であるから、長期にわたる人的交流が観察できないことは、この種の研究には致命的な欠陥になる。今後、それを補う調査・研究を実施することが新たな課題である。また、経済活動や親族構造、日々の生活などの諸点において、ヤム

島は完結していない。本島のイースト・ケープとは、親族組織や、婚姻や移動を介したクランのあり方など、密接な関係が構築されているので、いずれ本島の調査も視野に入れて研究する必要があるだろう。

なお、本報告を提出するに当たって、考古学専修二年生の千田麗紗子さんにお手伝いいただいた。明記して謝意を表したい。

最後になったが、本研究は、以下の研究費からの助成を受けている。高橋龍三郎（学術フロンティア「研究課題名：狩猟採集民における社会の複雑化に関する考古学研究」【戸山リサーチセンター】）、（オープンリサーチセンター「課題名：日本文化の源流に関する共同的研究プロジェクト（會津八一記念博物館：研究代表者・大橋一章）」）、細谷葵（文科省科学研究費（奨励研究）（課題番号一七九〇四〇三〇）「研究課題名：日本植物考古学の基礎づくり―縄文・弥生文化の考古植物データ集成と民族調査を中心に」（平成17年度）（高橋龍三郎）

註

(1) Tabam・Iabamaの両方のアルファベット表記法が知られている。今回の概報含め以後の報告では、「Awala語の研究者であるEzard (1997) に従いTabamに統一する。

(2) 類似した組石は、ミルンベイ州の多くの島々において、ムラの中で多数派を占める hamlet の近くに作られる事が指摘されている (Seligmann 前掲, pp463-465)。こうした組石の用途は様々であろうと考えられ、必ずしも葬制にのみ関わるものではない。例えばトロブリアンド諸島では大きな立石を伴う方形組石が測量調査され、古い年代の土器破片や人骨が周囲から見つかっている (Austen 1939)。本例は中央に長めの石を配して周囲を礫で楕円形に囲む形であり、サイズも小さく(長径一メートルに満たない)土器・人骨の集積等もなかった。島の発見譚を含め、構築年代の推定を目指した追加の聞き取り調査が必要であろう。

(3) もしくは「再埋葬」。こうした二次葬は、メラネシア・ポリネシアに広がる類似した要素の一つでもある。中でもミルンベイ州では土器を何らかのプロセスに用いるのが一般的であるらしい。本調査で聞き取り調査した葬法のプロセスには、①土壙墓に胴体を埋葬し、頭部に土器を逆位に被せる②胴体の白骨化に伴い、土器を外して頭骨を取り出す③頭骨を巨石の下に集積させる、という三工程がある。類似した二次葬については、Tubetube 島における葬法のプロセスが紹介されている (Macintyre 1989)。今回の調査では Skull Cave という用語としてこれを認識していたが、この地域に普遍的な用語であるかは不明であり、今後の検討を要する。

参考文献

- Austen. 1939 Megalithic Structures in the Trobriands, *Oceania* vol.X, no.1
- Ezard, Bryan. 1997 *A Grammar of Tawala: An austro-nesian language of the Milne Bay area, Papua New Guinea*, Pacific Linguistics Series C-137, RSPAS, the Australian national university.
- Longacre, W. and J.Skibo. 1994 *Kalinga Ethnoarchaeology: Expanding Archaeological Method and Theory*, Smithsonian Institution Press.
- Macintyre, Martha. 1989 'The Triumph of the Susu: Mortuary Exchange on Tubetube' in *Death Rituals and Life in the Societies of the Kula Ring*, edited by Frederick H. Damon and Roy Wagner, Northern Illinois University Press.
- Mallet, Shelly. 2003 *Conceiving Cultures: reproducing people and places on Nuakata, Papua new Guinea*, the University of Michigan Press.
- May, and Tucson 1982 *The Traditional Pottery of Papua New Guinea*, University of Hawaii Press.
- Seligmann, C.G. 1910[1976] *The Melanesians of British New Guinea*, University press, Cambridge.
- Stark, M. 1993 *Pottery economics: a Kalinga ethnoarchaeological study*, UMI Dissertation Services.
- Takahashi & Hosoya, 2002 *Nut Exploitation in Jomon*

Society, S.L.R. Mason & J.G. Hather 編 *Hunter-Gatherer Archaeobotany: Perspective from the northern temperate zone*, University College London Press, pp.146-155

Wilson, P.J., 1988 *The Domestication of the Human Species*. Yale University Press.

浅川滋夫 一九九一 「高倉の民族考古学」直木・小笠原編、

『クラと古代王権』、ミネルヴァ書房

小林繁樹 一九七八 「New Guinea 東海岸地域の土器―その

製作、流通、利用の諸例について―」『小林知生教授退職

記念考古学論文集』、南山大学小林知生教授退職記念会編

坂口 隆 二〇〇三 『縄文時代貯蔵穴の研究』未完成考古学

叢書

佐藤達夫 一九七四 「土器型式の実態―五領ヶ台式と勝坂式

の間―」『日本考古学の現状と課題』日本歴史学会編、吉

川弘文館

高橋龍三郎 二〇〇五 a 「民族誌からみた縄文土器型式の意

味」『縄文社会をめぐるシンポジウムⅢ』予稿集

高橋龍三郎 二〇〇五 b 「パプア・ニューギニアの生業に関

する民族調査」『社会考古学の試み』、同成社

細谷 葵 二〇〇三 「植物考古学からみた弥生階級制社会の

成立と農耕サイクル―「弥生大型建物モデル」と大阪府池

上・曽根遺跡」『史観』一四八

細谷 葵 二〇〇五 「パプア・ニューギニアの農耕活動に関

する民族調査」岡内三眞・菊池徹夫編『社会考古学の試み』、同成社

根木 修 二〇〇五 「水稻耕作における種籽貯蔵の意義―弥生時代を中心として―」龍谷大学考古学論集刊行会『龍谷大學考古学論集Ⅰ』

山内清男 一九六九 「縄文文化の社会」『日本と世界の歴史1 古代』、学習研究社